シャーロック・ホームズの洞察と盲点
『バスカヴィル家の犬』における結婚の制度

難 波 江 和 英

Summary

The Insight and Blindness of Sherlock Holmes
The Institution of Marriage in *The Hound of the Baskervilles*

Kazuhide Nabae

Having read all stories featuring Sherlock Holmes, the reader is amazed at a variety of tricks which the author, Sir Arthur Conan Doyle, has presented in his literary career. What strikes the reader as more amazing is that Holmes has hardly changed his method of investigation.

Although Holmes's method has been little modified in the course of his life, it has indubitably guaranteed his fame as a first-class detective. A theoretical analysis of his method will therefore cast light on the foundation of his insight into crimes. Herein lies the fundamental objective of the first part in this paper. It will be made clear through discussion that Holmes draws on deduction as a basic principle and that his method, not fully deductive in itseif, is substantiated by several practical principles. They are (1) observation and knowledge, (2) exclusion, (3) probability, (4) analytical reasoning from effects to causes, (5) the reconstruction of the crime at issue, and (6) imagination.

Applying this view to the case in *The Hound of the Baskervilles*, the second part of this paper will elucidate the process in which Holmes's insight forms the determining cause of his blindness. In other words, his blind spot becomes manifest outside the range of his method as he integrates all essential factors involved in a crime into a comprehensive whole, thus centralizing the area of his insight. A further analysis will show that his blindness is characterized by his failure to see marriage as a social institution and that he practices reasoning within the framework of the nineteenth-century metaphysical heritage. In conclusion, if the preceding century is dominated by the discourse of love, while the twentieth century by the discourse of sexuality, Holmes can be seen as a detective embodying a shift from the former discourse to the latter.

シャーロック・ホームズの洞察と盲点
『バスカヴィル家の犬』における結婚の制度

序

あるイギリスの作家が，19世紀から20世紀にかけて，約8年の中断があるとはいえ40年もの歳月にわたり，一人の探偵を主人公とする物語を書き続けた。それも手を変え品を変えて，読者を飽きさせない創意工夫をこらし，しかも一度は物語の執筆を断念するつもりで探偵を葬り去った（？）にもかかわらず，読者の哀願や脅迫を受けて探偵を死の縁から蘇らせ，その後も約四半世紀をかけて物語を書き続けた。その結果，同じ探偵を主人公とする物語が，短編集4冊（56の短編）と長編5冊として世に残ることになった。

この希有な作家，アーサー・コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle 1859–1930）が誕生したのは，1859年5月22日のことである。奇しくも，チャールズ・ダーウィン（1809–82）が『種の起源』を発表し，J・S・ミル（1806–73）が『自由論』を出版したのもこの年なら，メアリー・アンがジョージ・エリオット（1819–80）として性別を隠しながら最初の長編小説『アダム・ビード』を世に問い，イギリス医師会がエリザベス・ガレット・アンダーソン（1836–1917）に国内で医学教育を受けた女性として最初の許可書を与えた[1]のもこの年である。ここに見るとおり，思想の展開にせよ，女性の台頭にせよ，イギリスの近代社会は，その誕生から一世紀半あまりを経て，それまで蓄積してきた文化のエネルギーを放射して，人間に関する新しい認識を目に見える形で実現し始めていた。いまなお名探偵として誉れの高いシャーロック・ホームズが誕生し，犯罪を解明するための方法を身につけて，数々の事件を解決に導き始めたのもまた，この時代を背景にしてのことである。

ホームズの物語を出版順に読み通してまず驚かされるのは，作家のドイルが多彩な事件のトリックを考えたことである。しかし他方，探偵のホームズが，その数々の事件を解明するにあたり，あまり捜査の方法を変えなかったことには，なおさら驚かされる。ホームズが「グロリア・スコット号」（1893：事例1874）の事件で捜査を手がけ始めてから，「最後の挨拶」（1917：事例1914）の事件で捜査を終えるに至るまで，彼には探偵として約40年の経歴があり，しかも「経験」（「技師の親指」1892：388）を尊重する旨の発言まであるにもかかわらず，犯罪を解明するための彼の方法には，進歩と呼べるほどの著しい変化は認められない。ここには，彼が探偵として残した功績の特徴を考察するに際して，最初で最後の問題がある。

それでは，なぜホームズは捜査の方法を変えなかったのか。これには幾つかの理由が考えられる。その一つは，ホームズが前世紀の人間類型として「倦怠」（ennui「赤毛組合」1891：251）に襲われ，その影響から逃れるために事件の捜査に関与していたことである。彼にとっては，新しい捜査の方法を開発するより，すでに身につけている捜査の方法を実際に行使するほうが，はるかに刺激に満ちた行為だったのである。つまり彼は，考える人であるというより，

考えることを生きることに同調させて，忍び寄る「倦怠」をまぬがれようとした人である。彼自身も「赤毛組合」の最後で認めているように，彼の人生は「存在の些末事から逃れるための一つの長く続く努力」に終始しており，「ささやかながら事件があるので，それがかなえられる」類のものである（Ibid.）。ここからも窺えるとおり，彼に必要なのは，新しい捜査の方法ではなく，彼の捜査の方法を最大限に機能させて，「激しいエネルギーの爆発」（「マスグレーヴ家の儀式」1893：528）や「素晴らしいエネルギーと生気の発作」（『四つの署名』1890：205）を誘発し，人間としての生命を発露させてくれる事件である。

このことから推察して，ホームズが捜査の方法を変えなかった理由が，あと二つ考えられる。その一つは，彼が若いころから，すでに捜査に必要な高度の方法を修得していたことである。そのため彼には，自分の方法を大幅に変更する必要はなく，それを最も効率よく実践するための方法にこそ，彼の関心があったと言える。実際，ホームズが1874年（？）に「グロリア・スコット号」で最初の事件に関わったとき，彼はまだ20歳前後の学生だったにもかかわらず，「そのころからすでに一つの方法（a system）となっていた［彼］の観察と推理の習慣」（512）を自覚し，探偵として身を立てるだけの「才能」（513）があるかもしれないと自信を深めている。それから数年の歳月が流れて，1881年にワトソンがホームズと初めて出会ったときにも，世界で唯一の「顧問探偵」と自称していたホームズは，「観察にも推論にも才能がある」と豪語している（『緋色の研究』1887：15）。これ以前にも以降にも，彼が捜査の方法を根本の原理から再編し直した形跡はない。

ホームズが捜査の方法を変えなかった理由として，もう一つ考えられるのは，彼が事件の捜査にあたる前から，ある基準で事件を選んでいたことである。読者からすれば，彼は次々と起こる事件を解決していく名探偵のように見えるかもしれないが，実のところ，彼は刺激のありそうな事件，つまり「彼の想像力に訴えかけ，彼の技巧に挑戦するような奇妙で劇的な特質」（「黒ピーター」1904：773）をもつ事件にしか関心を示さなかった。彼にとって，報酬や名声は二の次で，「仕事そのもの，［彼］ならではの力を試せる場を見つける喜びが，［彼］の最高の報酬」（『四つの署名』108）である。それゆえ，彼の方法を試すまでもない「場」で捜査にあたることは，彼には「仕事」の名に値しないし，他方，彼の方法を試せる「場」こそが，彼には「事件」となる。ホームズの1895年の活躍を伝えるワトソンの表現によれば，この探偵は（1890年代という時代を考慮すればなおさらのこと），たとえ世紀末の芸術家の類型として，ワイルド風の「芸術のための芸術」（「隠居絵具師」1926-7：652）を標榜していると揶揄されようとも，あくまで「自己の芸術のために生きていた」（「黒ピーター」772）のである。かつてフローベールがジョルジュ・サンドに書き送った文章を引用しながら，彼自身も「人は何ものでもなく，作品がすべてである」（「赤毛組合」251）と語っている。見方を変えれば，彼にとって「事件」とは，何かが起こる「こと」であるというより，むしろ彼の捜査の方法によって見事に（再）構成される「もの」である。たとえば「海軍条約文書」（1893）でも，探偵の任務は，与えられた事実から本質に関わるものを選び取り，それを整然と繋ぎ合わせて，事件の筋道を「再構成」（641）するところにあると規定されている。彼が捜査の方法を変える必要のなかった理由は，

案外このあたりにあるのかもしれない。つまり，事件とは過去を推理により「再構成」した構築物であるという彼の発想が，そもそも彼独自のものではなく，真理を「全体」と見なし，その「全体」を理論の体系（a system）として実現できると信じた近代科学の理念から派生したものにすぎないということである。

いずれにせよ，ホームズが探偵として活躍していたころ，彼が最も頼りにしていた捜査の方法とは，どのような原理に基づいているものだったのか，それを考えておかなければならない。そうすることによって，彼に何が見えていたのか，また逆に何が見えていなかったのかを時代の思潮に照らして明らかにしていきたい。それゆえ本稿のⅠ章では，彼の推理の方法を根本の原理から考察して，彼の洞察とは何か，そして彼の盲点とは何か，その本質を思考の構造から見極めるための準備を進めておく。本稿のⅡ章では，前章で考察したホームズの推理の原理をふまえて，この探偵が『バスカヴィル家の犬』(1901–2) で推理を実行する方法を検証し，彼の洞察がそのまま彼の盲点の起因ともなる経緯を実証する。そこから見えてくるのは，ホームズが探偵として彼独自の推理を展開しているかに見えるときでさえ，彼は彼自身も気づかないところで，前世紀の時代が提供してくれた思考の方法の内側で思考していることである。

Ⅰ　シャーロック・ホームズの方法

シャーロック・ホームズが理想とする捜査の方法を知るには，それについて彼自身が書いた文書を読むに越したことはない。これは「生命の書」(『緋色の研究』14) と題され，1881年3月4日の朝，ワトソンが手にした雑誌に掲載されていた記事であり，ホームズが27歳のころの書き物である。それによれば，犯罪を解明するために必要不可欠なのは，「観察」と「推理」と「分析」の才能である (14)。そのなかで最も重要と思われるのは，『緋色の研究』で第2章のタイトルにもなっている「推理学」(9) である。それと同時に，やはり「学」(science) を冠して言及されている「分析学」(14) の意義も忘れてはならない。それというのも，ホームズはそもそも，捜査を「厳密な科学」(an exact science『緋色の研究』29・『四つの署名』108) の域に高め，探偵を「科学者」(「孤独な自転車乗り」1903–4: 728) と同列に置いた世界で最初の探偵として，後世に名前を残すと思われていたからである。しかも，ホームズがまだ学生だったときに経験した「グロリア・スコット号」の事件でも，そしてまた彼が「生命の書」を書いた年より2歳ほど若いころに経験して，名探偵としての地位を築く契機ともなった「マスグレーヴの儀式」の事件でも，彼の「観察と推理」(512・530) の才能は強調されていても，彼の「分析」については，充分に説明がなされていないからである。それゆえ，ホームズの捜査の方法を支配している原理を明確にするためには，どうしても彼の推理と分析の何たるかを考察しなければならない。

ホームズの推理の才能は，あるとき突然，開花したものではない。先にも触れたとおり，彼が「グロリア・スコット号」で最初の事件に関わったとき，彼にはすでに「観察と推理の習慣」が「一つの方法」として備わっていた。この事件でホームズは，彼の大学時代の親友ヴィクターの父親，トレヴァ治安判事が，ある手紙を読んで驚き，そのため死を遂げた謎を解明するこ

とになる。トレヴァ老人は生前，息子からホームズの卓越した推理について聞かされていたが，それは誇張にすぎまいと高をくくっていた。そこでホームズが訪問したときにも，この老人は気楽な思いで，「わしは格好の対象じゃ，もしお前さんが，わしから何か推理できるならのことだが」(512) と彼に告げた。そうすると驚いたことに，ホームズは次々と正確に事を見て取り，ついには老人の「痛い所」(513) まで突いて見せて，彼を失神させてしまう。このときホームズが遂行した推理のなかから，前提と結論が共に示されているものを列挙して，彼が学生時代から身につけていたと思われる捜査の方法の原理を考察してみる。

(1) (前提) この老人は立派なステッキをもっており，その銘字から見て，それは1年以内につくられたものであり，しかもわざわざ頭部に穴を開けて，そこに鉛を溶かして流しこみ，武器として利用できるようになっている。

(結論) 彼は，ここ1年以内に，誰かに襲撃されるのではないかと恐れていた。

(2) (前提) この老人の両耳は妙に平べったく，しかも厚くなっている。

(結論) 彼は若いころ，かなり拳闘をした経験がある。

(3) (前提) この老人の両手にはタコがある。

(結論) 彼は，かなり採掘に関わったことがある。

(4) (前提) この老人の片方の肘にJ・Aの刺墨があり，その文字がぼやけて見えて，しかも文字の周辺の皮膚がただれているところからして，彼はその刺墨を消そうとした。

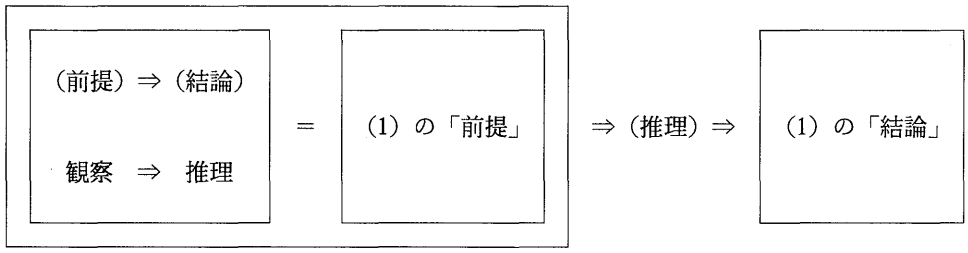
(結論) 彼は，頭文字がJ・Aの人と親密な関係にあったが，その後は，この人のことを完全に忘れ去りたいと願っている。

(これを聞いて，まもなく老人は失神する。)

これらのホームズの推理は，はたしてどういう推理なのか。内井惣七氏の『シャーロック・ホームズの推理学』を参考にして，その問題を考えてみることにする[2)]。ここには考察の対象として，少なくとも四つの推理がある。あえて「少なくとも」という限定をつけたのは，内井氏も指摘しているとおり，この種の推理が「さらに別の情報や推理」(23-4) から導かれることもあるからである。これらの推理のなかで，ホームズの推理の特徴が顕著に認められるのは (1) と (4) だと思われるから，それらを代表例として取りあげる。(残された (2) と (3) については，(1) と (4) を考察する過程に包摂されるので，あえて詳しい説明は省略する。)

(1) の例で最初に注意すべきなのは，その「結論」の部分ではなく，「前提」となる部分である。なぜならホームズは，この「前提」を形成するにあたり，観察ばかりか推理も行っているからである。それを少し詳しく見ておくと，トレヴァ老人が立派なステッキをもっていることも，その銘字から見て，それがつくられてから1年に満たないことも，そしてさらには，その頭部に穴を開けた跡があり，そこに溶けた鉛が流しこまれていることも，すべてホームズの観察である。これらの観察から，彼は (1) の「結論」に達する以前の段階で，つまり (1) の「前提」を形成する段階で，トレヴァ老人がステッキを武器に改造していたと考えている。これは彼の観察ではなく，観察からの推理である。換言すれば，彼は (1) の「前提」から直ちに (1)

の「結論」を推理しているかに見えながら，実際には，まず（1）の「前提」を推理により完成して，それからその「前提」を仮説として，今度は（1）の「結論」に達する推理を続行している。要するに（1）の推理の全過程は，二段階の推理から構成されている。このときのホームズの推理の過程を図示すれば，次のようになる。



この推理の全過程には，見過ごせない問題が二つある。その一つは，（1）の「前提」そのものが必ずしも成立しないことであり，もう一つは，たとえ（1）の「前提」を認めたとしても，必ずしも（1）の「結論」は認められないことである。

トレヴァ老人のステッキの頭部に穴を開けた跡があり，そこに溶けた鉛が流しこまれている。これはホームズの観察なので認めるとして，だからといって，この老人がステッキを武器に改造していたとはかぎらない。他の誰かの仕事かもしれないし，そもそも老人が武器を必要としていたかどうか疑わしい。単にステッキのバランスを変えて，歩きやすくしたかったのかもしれないし，ステッキを地面に置いたとき，それがころがるのを防ぎたかったから，という笑い話のような理由も，まったく考えられないわけではない。いずれにしても，（1）の「前提」が絶対に確実であるという根拠はない。これが第一の問題である。それでも百歩譲って（1）の「前提」を認めたとしても，以下に見るとおり，必ずしも（1）の結論を認めることにはならない。そこに第二の問題がある。

たとえトレヴァ老人が立派なステッキを購入し，それがここ一年以内につくられたものであり，かつ武器に改造されていたとしても，それだけの理由から，約1年もの間，彼が誰かに襲われると察して脅えていたとはかぎらない。もしかすると彼は，ふと身体の衰えを感じ始めて，ステッキを購入することを思い立ち，それを単なる護身用に改造しておいただけのことかもしれない。そもそも暗殺を本気で恐れるなら，ステッキを改造するより，銃をもったほうが無難である。これまで見てきたとおり，（1）の「前提」にせよ，（1）の「結論」にせよ，この例に見るホームズの推理には，幾つも例外を想定できる。それゆえ，この推理を演繹推理と呼ぶことはできない。（これは（2）と（3）の例についても言える。）もし演繹推理なら，ある前提を認めれば，そこから導かれる結論を例外なく認めざるをえないからである（内井 24）。それでは（1）の推理は，どういう推理なのか。それを考える前に，まず（4）の推理を先に見ておきたい。

これまでの議論の流れからわかるとおり，（4）の推理にも（1）の推理と同じ原理が認められる。つまり，ホームズは（4）の「前提」を形成するにあたり，（1）のときと同じく，観察ばかりか推理も行っている。トレヴァ老人の片方の肘にJ・Aの刺墨があるのも，その文字がぼや

けて見えるのも，そして文字の周辺の皮膚がただれているのも，すべてホームズの観察の結果である。しかし，この老人がJ・Aの刺墨を消そうとしたというのは，彼の観察ではなく，観察からの推理の結果にほかならない。ここでもホームズは，(4) の「前提」から直ちに (4) の「結論」を推理しているかに見えながら，実際には，まずその「前提」を推理により完成して，それを根拠にしながら，全体の「結論」に達する推理を続行している。先に見た (1) の場合のように，(4) の推理の全過程もまた，二段階の推理から構成されている。そこから想像できるとおり，(4) の推理の全過程にも，(1) の推理の全過程と同じく，やはり見過ごせない問題が二つ含まれている。その一つは，(4) の「前提」そのものが必ずしも成立しないことであり，もう一つは，たとえ (4) の「前提」を認めたとしても，必ずしも (4) の「結論」は認められないことである。

トレヴァ老人の片方の肘にJ・Aの刺墨があり，その文字がぼやけて見え，しかも文字の周辺の皮膚がただれている。これはホームズの観察の結果なので認めるとして，だからといって，この老人がJ・Aの刺墨を消そうとしていたとはかぎらない。他の誰かに無理矢理に消されたのかもしれないし，不注意から薬品をこぼした結果かもしれない。事故の疑いもある。いずれにしても，(1) の「前提」と同じく，(4) の「前提」も絶対に確実であるという根拠はない。しかし，ここでも百歩譲って，あえて (4) の「前提」を認めたとしても，それではたして (4) の「結論」を認めることになるかといえば，これもまた疑わしい。

トレヴァ老人の片方の肘にJ・Aの刺墨があり，その文字がぼやけて見え，しかも文字の周辺の皮膚がただれているとしても，それだけの理由から，かつて彼がJ・Aの頭文字の人と親密な関係にあり，それにもかかわらず，いまはその関係を清算したいと願っていることは確定できない。たとえばJ・Aは人の名前ではなく，場所か組織の名前だったかもしれない。あるいは嫌悪の対象（たとえば『緋文字』の“A”のように，忘れられない過去）の象徴だったかもしれない。かつてはそれに囚われていたが，もはやその必要がなくなる状況（たとえば夢の実現）が訪れ，その文字を苦痛を覚悟で消そうとしたのかもしれない。このように考えれば，(4) の「前提」にせよ，(4) の「結論」にせよ，この例に見るホームズの推理には，(1) における推理と同じく，やはり幾つも例外を想定できる。それゆえ (1) と (4) の推理は，いずれも演繹推理ではない。演繹推理とは，先にも触れたように，前提と結論が必然の関係にあり，例外を許さない「厳密な推理」（内井 Ibid.）だからである。それではなぜ，捜査を「厳密な科学」に近づけようとしたホームズが，厳密とも思えない推理を継続しているのか。その推理とは，はたしてどのような推理なのか。あるいはまた，それでもなお，彼の推理が犯罪の解明に有効であるのはなぜか。その理由を改めて考えてみなければならない。

これまでの考察から，少なくとも「グロリア・スコット号」については，ホームズの推理を演繹推理とは呼べないことがわかった。しかし，それは必ずしも，彼が演繹推理を意図していなかったということではない。たとえば『緋色の研究』で，あまりまだ捜査に進展がないころから，ワトソンはホームズがすでに「すべての事実を説明する理論」(34) をもっているのではないかと考えている。たしかにホームズは，物語の終盤で捜査の過程を振り返りながら，被害

者の死因を強制による毒殺と確定できたのは，「他のどの仮説でも事実とは合わない」(101) からだと語っている。これを「毒殺という仮説だけが事実を説明できる」と解釈すれば，彼の思考に潜む演繹推理の傾向を見て取ることができる。その意味で，この事件のホームズは，数年前の「グロリア・スコット号」の事件のときより，かなり推理の原理を徹底しているかに見える。実際，彼が実行する推理も，前提から結論に至るまで，「グロリア・スコット号」のときと比較して例外が認められない。

たとえばホームズは，死体の口に漂っている「酸っぱい臭い」を嗅ぎわけ，そして死体の顔に「憎悪と恐怖」の表情が残されているのを見て，そこから，被害者の死因は誰かに強制されて飲まされた「毒」にあると断定する (101)。もしかすると彼には，この「酸っぱい臭い」から「毒」を察知するばかりか，その「毒」を特定することさえ可能だったかったかもしれない。なぜなら，そのころ彼は「一流の化学者」(5) でもあり，しかも「毒物全般」(12) に精通しているだけでなく，ある毒物の「反応を正確に知ろうとする探求心から」(6)，それを友人に飲ませるか，あるいは自分でも飲みかねないほど緻密な知識を欲していたからである。この毒に関する彼の知識欲が，被害者の死因に関する彼の推理から例外を取り除くのに役立たなかったとは考えにくい。しかし無論，彼の知らない毒が，例外として世界にまったくないとも考えにくい。この事例では幸いにして，彼の毒に関する豊かな知識が，極力，彼の推理に例外を許さなかったにすぎない。

他方，被害者の死体の表情からは，毒殺を強制された戦慄とは別の原因を，幾つか例外として想定できるかもしれない。まったくの素人なら，たとえば心臓麻痺なり突然の自然死なりを考えないともかぎらない。しかしホームズには，これらの仮説を否定する根拠が少なくとも二つある。その一つは，「心臓麻痺か突然の自然死なら，死者は決して動揺した表情を顔に残さない」(101) ことである。探偵としての彼には，これまでの観察か知識により，それがわかっている。もう一つは，死体の口から「酸っぱい臭い」が漂い，ある「毒」を示唆しているからには，それを「心臓麻痺か突然の自然死」と組み合わせるのは矛盾になるということである。ここで彼は，毒殺という結果から逆に推理して，死者の口には毒らしい臭いが残り，その顔の表情には苦渋が浮かぶと仮定し，それを認めるなら，「心臓麻痺か突然の自然死」は原因と考えられないと結論している。たしかに，この推理そのものにも確証はないかもしれないが，この場合には，死者の口の「酸っぱい臭い」が事実としてあり，この事実を「毒」以外では説明しきれないので，毒殺を死因とする前提を否定することはできない。それゆえ，この結果から原因に至る推理の結論は，限りなく真に近いと考えられる。

この「逆方向の推理」(内井 71) こそが，ホームズにとっては「分析」にあたる推理である。その目的は，ある確実と考えられる結果から原因にさかのぼり，その結果をもたらすために絶対に必要だった条件を探ることにある。もし結果を全体と見なし，原因の連鎖を部分と見なすなら，原因から結果を推理するのは，部分から全体を統合する行為であり，他方，結果から原因を推理するのは，全体を部分に還元する行為である。ホームズが前者の推理を「総合的」と呼び，それに対して後者の推理を「分析的」と呼ぶのは，そのためであると考えられる (『緋色

の研究』100)。いかに彼が「分析的推理」(Ibid.) を評価しているかは，たとえば彼が『四つの署名』で『緋色の研究』の事例に言及して，「先の事件で触れるに値するのは，そのお陰で事件の解明に成功した，あの巧妙な，原因から結果に至る分析的推理だけだ」(109) と語っていることからもわかる。彼はまた「ボール箱」(1893) の事例でも，「結果から原因を逆に推理する」(331) ことによって犯罪を解明しているし，さらに「六つのナポレオン」(1904) の事例でも，彼はレストレード警部が「逆の順序」(823) で事件の経緯を見ていると指摘して，凡庸なる人間が，原因から結果を推理するのに慣れすぎていることを揶揄している。これらはすべて，彼が「分析」と見なす推理の効果を例証するものである。[3)]

ホームズが『緋色の研究』で犯罪を解明するにあたり，もう一つ極めて有効だった推理の原理がある。いわゆる「消去法」(101) である。その効果が顕著に現われるのは，彼が死体の口の臭いと顔の表情を推理の前提として関連させながら，真の死因と考えられるものから疑わしい死因を限りなく取り除いたときである。つまり彼は，犠牲者の死に関する因果関係を幾つか仮説として考え，その内から，問題の事例を説明できないもの，もしくは説明しにくいものを排除して，最も適切なものだけを結論として残している。先に見たとおり，ホームズが被害者の死因として毒殺を受け入れたときにも，やはり彼はこの規則に従って，たとえば「心臓麻痺か突然の自然死」を不適切な仮説として退けていた。ここに見られる選択と排除の姿勢は，大局から見れば，この物語の第2章で彼が説明している知識の選別と整理の姿勢にその基礎を置いている。彼によれば，「愚かな者」は目につくものを取り込むので，「役に立つかもしれない知識まで溢れたりする」が，他方「熟練した職人」は，「仕事をするときに役に立つ道具しかもたず，といっても種類は数多くあって，しかも整理 (order) が行き届いている」(11-2)。ここで彼は「科学者」を「熟練した職人」に喩えて，観察から得た事実を選別し，有効と考えられるものから有効と考えられないものを分離して，知識の「秩序」を形成する意義を説いている。彼が「消去法」を実行するとき，そこに介在しているのもまた，この彼の「秩序」への信仰である。

この「消去法」で捜査が進展した事例として，たとえば「花嫁失踪事件」(1892: 406)，「緑柱石の宝冠」(1892: 428)，「ブルース・パーティントン設計書」(1908: 376)，「白面の兵士」(1926: 501) など多数あり，そこからも，この方法に対するホームズの信頼度を窺い知ることができる。問題の『緋色の研究』の事例でも，彼は可能性の低い仮説を切り捨て，可能性の高い仮説を選び取って，犠牲者の死因を絞りこむことに成功している。ここからも察せられるとおり，「消去法」の問題は確率の問題とも深く関わっている。実際ホームズがワトソンの兄のことを「確率の法則」(『四つの署名』112) に従って推理したときにも，彼は「消去法」を併用して，ありそうにないことを除去している[4)]。しかも『緋色の研究』では，彼が仮説の取捨選択を直感と思える速度と効率で実行しているところから見て，彼には，「消去法」や「確率の法則」を瞬時に生かすための重要な才能が認められる。その才能こそ，彼が「想像力」(「白銀号」(1892-3: 468・「隠居絵具屋」1926-7: 661) と呼ぶ精神の働きである。それに加えて，彼は「強制して毒を飲ませるのは，犯罪史では目新しいことではない」(101) と知っており，その知

識によって，「想像力」で得られた結論を傍証さえして見せる。それゆえ彼は「グロリア・スコット号」のときと同じく，この事例でも，観察と知識と想像が働きかけあえば，既存の推理の原理が機能して，捜査を成功に導くことを実証している。もしこれらの事例に相違があるとすれば，それは推理を実行するための前提となる仮説が，どれほど確実に形成できるかの相違である。いずれの事例にしても，ある仮説が観察と知識と想像から確定されれば，彼の推理は，その仮説の「確率」に応じて機能するのであり，彼が何か新しい捜査の方法を試みる必要があるわけではない。彼はただ，犯罪には「強い類似」(15) があり，「日のもとには新しいものはない」(23) という黄金律を再確認しているにすぎない。

ここまでのホームズの推理の過程から，彼の捜査の方法を考えるにあたり，極めて重要なことが幾つか明らかになる。つまり，捜査の基本となる演繹推理を効率よく機能させるためには，(1) 観察なり知識なりで必要な情報を補いながら前提を形成すること，(2) 複数の前提が形成されたり，前提から複数の結論が推理できるときには，事実に合致しないもの，あるいは事実に合致しにくいものを消去すること，(3) 推理を実行する際には，それが事実に合致する確率を考慮すること，(4) 原因から結果を推理するばかりでなく，結果から原因を逆に推理すること，(5) これらを総合して，かつ前例を参照しながら，事件の筋道を復元すること，そして (6) 推理の全過程にわたって想像を働かせることである。これらを要約すれば，(1)「観察と知識」の重視，(2)「消去法」による推理，(3)「確率の法則」の尊重，(4) 結果から原因に至る「分析的推理」，(5) 犯罪の「類似」をふまえた事件の「(再) 構成」，そして (6)「想像力」の行使である。

ホームズにとって，演繹推理が捜査の基本原理であるなら，これらは演繹推理の展開を補完するための実践原理である。ここで重要なのは，基本原理となる演繹推理ばかりか，これらの実践原理も，前世紀の科学と論理学の方法から派生していることである。たとえば (1) の「観察」と (5) の「類似」は，常識からも察せられるとおり，科学の発想を規範にしている。J・ズィマンによれば，「科学の知識は主として観察から得られる」(42) のであり，ある観察の結果を他の人間と共有するには，生物学や解剖学にも見られるとおり，「パターン認識」(43) の方法が有効である。ホームズが「理想の推理家」の模範として名前を挙げている「キュヴィエ」(1769–1832) が，古生物学と比較解剖学の権威であるのは偶然ではない (「五粒のオレンジの種」300)。この学者が「たった一本の骨を観察して，ある動物の全体像を正確に描けた」(Ibid.) のは，彼自身から見れば，どの生物種にしても，生物個体の部分と全体に「類似」した関係が認められたからである。他方ホームズから見れば，犯罪は「生物」に似て，幾つかの出来事と呼ばれる「部分」と，その出来事から構成された事件と呼ばれる「全体」が，相互に関連しながら体系を保ち，犯罪間で「類似」した構造をつくりあげている[5]。それゆえ彼には，「一連の事象をつなぐ鎖の環の一つを充分に理解した観察者なら，その前後の他の環もすべて正確に説明できるはずである」(Ibid.) と確信がもてたのである。

このホームズの確信には，部分から全体ばかりでなく，全体から見て部分と部分の関係を推理したり，全体から部分を推理したりする意義も示唆されている。(この最後の発想は，(4)

で要約した「分析的推理」に通底する。）ある事件について，全体と部分の関係が確定できれば，これを新しい事件の捜査に「前例」（「花嫁失踪事件」399）として適用し，そこに「類似」が認められれば，その類型に従って事件を「（再）構成」することも可能になる。ここには，過去の事象のなかで機能している原因を仮定して，そこから現在の秩序の形態を説明したチャールズ・ダーウィンや，現在の事象を契機として，過ぎ去ったものや見えなくなったものを再構成する「回顧的予言」（6）に科学の基礎を置いたトマス・ハックスレー（1825–95）のような思想家の発想が背景として窺える。（この逆方向の予言も，現在の結果から過去の原因を推理するという意味で，（4）の「分析的推理」に通底する。）これらの発想を考慮すれば，先の（5）で要約した「事件の『（再）構成』」の原理も，そしてまた，その原理に支えられたホームズの「全体」への志向も，前世紀に成立した科学の方法に基礎を与えられていたことがわかる。

他方，先に要約した（2）「消去法」と（3）「確率の法則」も，やはり前世紀に確立された論理学の方法に依拠している。ホームズに見られる演繹推理の傾向は，たとえばJ・S・ミルが『論理学の一体系』（1843）で論じた「演繹法」（325）に基礎を求められる。その基本となるのは，「帰納，演繹，そして検証」（350）の三段階による証明である。まず前提となる原因を帰納により証明し，その前提から結論を演繹してから，そこに見る結論が成立するか否かを検証する。その検証の方法としてミルが考えたのは，最後に得た結論を「直接の観察による結果」と照合したり，「あらゆる既知の類例」に適用して確認することである（330）。さらにミルによれば，ある結論に達しても，その段階では仮説にすぎないので，その仮説を知識として認めるには，それによって既知の事実を説明できるだけでなく，他の仮説では同じ事実が説明できないことも確認する必要がある（351）。この最後の過程に含まれている原理が「消去法」に関わっている（内井57）。かつてホームズが，「消去法で僕はこの結論に達した，他のどの仮説でも事実とは合わないから」と語ったときにも，彼はミルの科学の証明に代表される思考の方法を踏襲していたことになる。

このミルと同じく，科学における証明の方法として演繹法を提唱しながら，ミルの方法に満足せず，そこに確率論の発想を導入する先鞭をつけたのは，デ・モーガン（1806–71）やW・S・ジェヴォンズ（1835–82）といった記号論理学者たちである（内井60）。たとえばジェヴォンズによれば，科学の方法は「近似値」（456）しかもたらさないので，観察と理論が合致しすぎている状況は，科学者を疑ってみる根拠にこそなれ，彼らを信頼する根拠にはならない。ホームズが「厳密な科学」を信奉しているのに対して，ジェヴォンズは「多数の人が『厳密な科学』たる表現に欺かれるおそれがある」（Ibid.）と警告している。それゆえ彼には，ミルの「演繹法」の文脈に従えば，前提となる仮説の確率，前提と結論の関係における確率，そして確実でない結論を消去する確率が問題として残る。そして彼の考えでは，しかるべき証拠さえ揃えば，「確率」こそが，人間の理性が信じられるものを決定する「判断の必須の基準」となる（197）。ホームズが『バスカヴィル家の犬』で，「蓋然性を秤にかけて，最もありえそうなものを選ぶ領域」（33）に入るとき，彼もまた「厳密な科学」を19世紀の神話として目標にしながら，この確率論の思考の扉を開けている。但し，彼にとって，与えられた仮説から最も確率の高いものを選ぶ

行為が，「想像力を科学的に用いること」(Ibid.) であるとは，あまり記号論理学者からは聞けそうにない，彼独自の美学さえ感じさせる表現である。たとえ科学や論理学の基準から見て，ホームズの推理が厳密に思えないときでさえ，それが犯罪の解明に有効であるのは，これまで考察したとおり，先に要約した実践原理が，基本原理となる演繹推理を遂行させる方向に働くからである。その実行効率は，彼が開発したものであるというより，彼の時代に成立した思考の方法が彼に約束したものである。作者のドイル自身も自伝のなかで，19世紀の中頃のイギリスで大衆にさえ強い影響を与えた思想家として，「ハックスレー，ティンダル，ダーウィン，ハーバート・スペンサー，ジョン・スチュアート・ミル」(26) の名を挙げている。どうやらドイルは、これらの思想家たちの思考の方法を，ホームズの推理の方法に投影しながら，この探偵を創造したらしい。

これまでの考察を介して，ホームズの捜査の方法を支配している原理を必要最少限度に総括したと考える。しかし真の問題は，この先にある。彼が捜査を進めるにつれて，その前提となる仮説は信頼のおけるものとなり，そこから形成される結論は確実なものとなる。彼の脳裏では，犯罪の経緯が再構成され，事件は彼の推理の構築物として揺るぎないものとなる。この建物を思わせる事件の構造が，彼の洞察を保証する。あたかも，その構造の外側には何もないかのように。この状況は，写真を撮る人間の眼に起こる変化を連想させる。カメラの照準を合わせるにつれて，ファインダーを覗きこむ人間の瞳が緊張を強いられ，朦朧とした空間から焦点が極限の内側として浮かびあがる瞬間，その焦点の外側に茫漠として世界は広がり，視野から消える。ここには，人間にとって，見えるようになる経験が，見えなくなる経験でもあるという逆説が認められる。ホームズにとっても，新しい洞察の形成は，そのまま新しい盲点の形成でもあったはずである。これまで考察してきた彼の推理の原理は，はたして彼に何を見せることになったのか，そして彼から何を隠すことになったのか。それを『バスカヴィル家の犬』の事例を対象として検証することにする。

II　シャーロック・ホームズの洞察と盲点

シャーロック・ホームズを主人公とする物語全9巻のなかで，単行本として最初に発行されたのは『緋色の研究』(1887) であり，最後に発行されたのは『シャーロック・ホームズの事件簿』(1927) である。この約40年にわたる出版の歴史には，1894年から1902年まで約8年におよぶ中断があり，その期間を経て最初に発行されたのが『バスカヴィル家の犬』である。それゆえ出版年から見れば，この物語は，作者が読者の強い要望に応えて，再び名探偵の活躍を書き始めたころのものと誤解される恐れがある。実際，1901年8月，これが「ストランド誌」に掲載され始めたとき，読者のなかには，早とちりして，10年あまりも前に死んだはずの探偵が蘇ったと狂喜した者も多かったという[6]。しかし，この事件の発端となる殺人が起こったのは1889年6月10日頃であり，すべてが解決するのは同年10月20日頃ということになっている。これは無論，ホームズがライヘンバッハの滝で死亡したと思われた1891年5月4日より以前のことである。もし「最後の事件」での彼の失踪（もしくは偽装された死）を境にして，探偵としての

彼の経歴を前後に区分すれば,『バスカヴィル家の犬』での捜査活動は，その前半の最後の段階に位置づけられる。彼が「グロリア・スコット号」で最初に事件を手がけてから，約15年後のことである。この段階に至るまで，どのように彼は捜査の経験を積み，それをどのように犯罪の解明に生かしたのか。その成果のほどは,『バスカヴィル家の犬』での彼の捜査を検証することで明らかになる。

ホームズの捜査の方法は，往々にして物語の最初から提示される。たとえば『緋色の研究』の第二章や『四つの署名』の第一章は，いずれも「推理学」(9・107) と題され，彼の推理の原理を説明することを目的として掲げているかの印象を与える。『バスカヴィル家の犬』でも，「シャーロック・ホームズ」と題された第一章で，この探偵らしい推理の特徴が，やはり本人の実演を介して提示されている。推理の素材となるのは，捜査の依頼人が置き忘れて行ったステッキ（またもやステッキ！）であり，推理の対象となるのは，その見知らぬ依頼人自身である。この物語が他の物語と少し違っているのは，ワトソンが先に推理を試みて，ホームズがその誤りを修正しながら，彼自身の推理の原理を披瀝するところである。

このステッキは,「立派な堅い棕櫚の一種でつくられ，球状の握りがついており,『ペナン島のステッキ』として知られている種類」(3) である。その握りの下に「幅が1インチほどの銀の帯」が巻いてあり，それに「MRCS，ジェイムズ・モーティマーへ，CCH の友人一同より」と彫りつけてある (Ibid.)。そこには「1884」(Ibid.) の数字も見える。その種のステッキは,「古風な開業医が回診するおりに持ち歩いた」と思われるものであり,「堂々として，丈夫で，頼もしい」感じがする (Ibid.)。この物語もワトソンの回想記になっているので，このステッキに関する表現も，何気なく読めば，語り手としての彼が行った客観的な描写であるかに見える。しかし実際，これは彼の主観的な観察の報告であり，その一部はすでに彼の印象や推理を含んでいる。それゆえ，ワトソンがホームズにうながされて，先のステッキについて推理するとき，その前提となるのもまた，この観察にほかならない。

もう一つ，これと同時に見逃してならないのは，ホームズがワトソンに推理をうながしたときの表現である。つまり，“Let me hear you reconstruct the man by an examination of it.” (Ibid.) という文章である。わずか一文とはいえ，ここにはホームズの推理に関する重要な原理が透けて見える。この文章は，通常なら,「その［ステッキ］を見て，どういう持ち主を想像できるかね」というほどの意味である。ここで「通常なら」という限定をつけたのは，原文そのものからは，もっと複雑な意味が読み取れるからである。ホームズの発言は，字義通り訳せば,「その［ステッキ］を観察して，君がその男を再構成するのを聞かせてもらいたい」という意味になる。ここから窺えるのは，やはり彼にとって，事件とは「観察」から「再構成」される構築物だということである。この発想は，すでに見たとおり,「海軍条約文書」にも認められたものである。偶然か必然か,「海軍条約文書」の事件と『バスカヴィル家の犬』の事件は同じ年に起こっている。つまり，1889年頃のホームズには,「観察」から得られた事実を前提として，正しく推理を行えば，面識のない人間についても，解明されていない犯罪と同じく，その全貌を必ず「再構成」できるという確信がある。逆に言えば，彼は捜査にあたる前から，あらかじ

め事件を一つの「全体」として想定し，それを推理の過程を通して回復しているにすぎない。彼にとって，この「全体」の外側には何もなく，それそのものが事件のすべてである。この「全体」の秩序に対する信頼こそが，彼を前世紀型の探偵たらしめている。

ワトソンはステッキについて推理を始めるにあたり，「できるかぎり友人の方法に従って」(Ibid.) と断りを入れている。それゆえ，彼の推理を見れば，ホームズの推理の原理がわかるばかりか，それがどのように誤用されるかまで知ることできる。そこでまず，ワトソンの推理の展開を整理しておきたい。彼はステッキの持ち主であるモーティマーという人物が，「評判の良い，よくはやっている年輩の医者である」(Ibid.) と考える。その理由として，ワトソンはステッキが「感謝の印」(Ibid.) であることを挙げている。無論，医者の彼には，“MRCS” が “Member of the Royal College of Surgeon”（王立外科医学協会会員）の略語であることもわかっていたはずだから，そこからモーティマーを「医者」と結論したことは疑えない。しかし，これらの観察や事実からだけでは，たとえモーティマーが「好人物」であり，かつ「医者」であることは推理できたとしても，彼が「年輩」であることまでは推理できない。それゆえワトソンは，その結論に達する前に，ステッキと「年輩」を結びつける推理をしていたはずである。実際，彼はステッキの立派なつくりと威厳のある印象から，そしておそらく経験からも，それが「古風な開業医」によく見受けられる種類のステッキだと推理している。そして彼は，この推理を前提に含めてから，改めて推理を続行して，モーティマーが「評判の良い，よくはやっている年輩の医者」であるという結論に達したのである。この結論の正誤はともかく，彼の推理の過程そのものに問題は認められない。なぜならそれは，トレヴァ老人のステッキについて，ホームズが約15年前に試みた推理の模倣にほかならないからである。つまり，まず前提を推理により完成して，それから，その前提を仮説として新たに推理を続行し，そこから結論に達する方法である。もし結論に誤りがあるとすれば，それは前提の形成か推理の実行のいずれか，もしくは両方に問題があると考えられる。ここでは，ワトソンがモーティマーのステッキの「堂々として，丈夫で，頼もしい」という印象に欺かれて，そのイメージをモーティマー本人の年齢に投影して推理したところに問題があったのである。

ワトソンは次に，ステッキの消耗度から見て，モーティマーという人物は「回診」のため，かなりの距離を歩いていると推理し，ホームズ譲りの「確率」の法則を考慮して，彼が「田舎の医者」であると結論する (Ibid.)。ホームズの賞賛を得て，ワトソンは推理を続け，ステッキにあった “CCH” という略語の “H” を「狩猟会」(Hunt：4) と考えて，その会員たちが治療の御礼としてステッキを贈ったと結論する。この推理について，ホームズがあまりに褒めるので，ワトソンもその気になり，「彼の承認を得られるほど彼の方法を応用できるところまで，それを修得したかと思うと誇らしくもあった」(Ibid.) と自慢している。しかし，最初に見た徒歩の距離に関する推理はともかく，いま見た “H” の略字に関する推理には，ホームズならずとも首をかしげたくなる。仮にも医者である彼が，ステッキの持ち主を医者と推理しながら，はたして “H” の文字を見て「病院」ではなく「狩猟会」を思いつくものか。これも「確率」の問題と考えられるから，原文を否定する確実な根拠にはならない。確実なのは，ワトソンの推理

が，ホームズの推理に潜む不備と危険を反映していることである。つまり，ワトソンの突拍子もなく見える推理にこそ，ホームズの推理の枠組をすり抜けて，彼の視界から消えた現実の断片が投影されていることである[7]。その観点からすれば，定型の推理を繰り返しているのは，「聡明でない」ワトソンではなく，むしろ「天才」を自認するホームズである（Ibid.）。

ホームズの説明によれば，「医者への贈り物なら，狩猟会よりむしろ病院からなされるほうが，ありえる」のであり，「その病院の前に“CC”が置かれているからには，それを『チャリング・クロス』とするのが最も自然である」ことになる（5）。続けて彼は「そのほうが確率が高い」と念を押し，「もしこれを作業仮説と考えるなら，それを新しい根拠として，この見知らぬ客［の人間像］の構成（construction）に取りかかれる」と推理を始める（Ibid.）。ここには，本稿の1章で考察したホームズの推理の公式が，見事なまでに反復されている。その要諦となるのは，「確率」と「構成」の原理である。このどちらかで，ホームズにあって，ワトソンに欠けているものがあるとすれば，それは「構成」への意欲ではなく，むしろ「確率」への配慮である。そのためワトソンは，ステッキの消耗度から，モーティマーが苦労して徒歩で回診していると推理しておきながら，その直後には，何の根拠もないまま，ステッキの“H”を「狩猟会」と推理することになったのである。

こうして，ワトソンは「確率の法則」を忘れる「凡人」として表現され，他方ホームズは，事象の蓋然性にこだわり，より慎重に推理を進めて，探偵として「天才」となる準備を整えていく。たとえば彼は，「あのような贈り物をするのは，どのような場合にもっともふさわしいだろうか」と問い，その「確率」を考慮して，それは贈られる側が，「町の病院から田舎に移って開業する」ときであると推理している（Ibid.）。この推理から得られた結論は，そのまま新たな前提となり，そこから彼の推理をさらに展開させる。ここでもまた，かつてホームズがトレヴァ老人のステッキについて実践し，先ほどワトソンが模倣して見せた，あの二段階の推理の方法が反復されている。その反復を介して，ホームズはモーティマーの人間像を形成することに努め，その結果，この人物はワトソンの推理とは異なり，「30歳にもならない若者で，人には好かれるが，野心はない，うっかり者」（6）として「構成」される。この結論に達するに際して，ホームズが遂行した推理の過程を整理しておけば，以下のとおりになる。

（1）（前提）　チャリング・クロス病院で幹部になるほどの人物なら，その地位を捨ててまで田舎で開業したりするはずはないので，モーティマーの地位は，せいぜい病院に住みこみの準医師程度である。

（結論）　モーティマーは「30歳にもならない若者」である。

（2）（前提）　チャリング・クロス病院を去るにあたり，記念品として，モーティマーは友人たちからステッキを贈られている。

（結論）　モーティマーは「人には好かれる」人物である。

（3）（前提）　モーティマーはチャリング・クロス病院に留まることなく，そこでの昇進を断念している。

（結論）　モーティマーには「野心はない」。

（4）（前提）　せっかくモーティマーは友人たちからステッキを贈られたのに，それを置き忘れて帰った。

（結論）　モーティマーは「うっかり者」である。

このホームズの推理が，いかに破綻なく展開しているかに見えても，そこに隠れている問題を見逃してはならない。ここで彼が遂行した推理を大局から見れば，それは彼が以前から利用していた二段階の推理の応用にすぎない。つまり，ある前提から推理して第1の結論に至り，次に，その結論を前提とする推理により第2の結論に至る，この推理の連鎖を1単位として，これを必要に応じて繰り返す方法である。上記の（1）を例に取れば，まずモーティマーが「チャーリング・クロス病院で幹部になるほどの人物なら」と仮定し，そこから推理して，彼は「その地位を捨ててまで田舎で開業したりするはずはない」と結論する。次に，その結論を前提として仮定し，さらに推理を続けて，「モーティマーの地位は，せいぜい病院に住みこみの準医師程度である」と結論する。そして最後に，その結論を前提として，そこから推理を進め，「モーティマーは30歳にもならない若者である」と結論する。この場合には，先に説明した推理の連鎖を実質として2単位繰り返したことになる。

このパターンを反復し続けるかぎり，ホームズの推理の方法には，たとえ歳月を経ても，かつての問題がそのまま残ることになる。その問題とは，「グロリア・スコット号」の事例で見たとおり，第1の結論が必ずしも成立しないことであり，あえて第1の結論を認めたとしても，必ずしも第2の結論は認められないことである。上記の（1）を再び例に取れば，たとえモーティマーが「チャーリング・クロス病院で幹部になるほどの人物なら」と仮定して，そこから推理を実行しても，彼が「その地位を捨ててまで田舎で開業したりするはずはない」と必ずしも結論できない。何らかの理由で病院を退職し，田舎で開業する「幹部」もあれば，病気の療養のため田舎に移り住み，健康法として歩くことを日課にしている「幹部」もあるかもしれない。ここに見るとおり，（1）の前提そのものに例外が幾つも考えられるので，その前提から推理して，必ずしも（1）の「結論」を認めることはできない。それでは，ホームズにとって，ここに提示されている問題の本質は，実際どこにあるのか。

それを考えるためには，二種類の「現実」を想定してみる必要がある。その一つは，ホームズが推理を始めるにあたり前提とした「現実」（実際の世界）であり，もう一つは，彼が推理により結論として得た「現実」（仮説としての世界）である。たとえば，人間としてのモーティマー自身は前者にあたり，モーティマーの人間像は後者にあたる。無論，前者から後者が派生しているのであり，その逆ではない。もしホームズの推理により構成された「現実」（モーティマーの人間像）が，その推理を可能にした「現実」（人間としてのモーティマー自身）を取り込み，双方の派生の順序を逆転するほど，まことしやかに見えているかぎり，そこに深刻な問題があるとは認めにくい。しかし，ホームズがモーティマーについて破綻のない推理を終えたと思われた瞬間，ある要素が，その自律した推理の構築物の外側を漂い始め，いま完成されたばかりの秩序を崩しにかかるとすれば，それは彼にとって深刻な事態ともなりかねない。その状況は，あたかも彼の推理をもたらした起源としての「現実」が，彼の推理からもたらされた虚構とし

ての「現実」に組み込まれまいとして，その不可視の豊穣で抵抗するかのようである。ホームズの推理の盲点となり，彼の洞察を脅かすことにもなった問題の要因，それは次に見るとおり，結婚という制度である。

たしかにホームズは，モーティマーについて正確な推理を行ったが，その彼でさえ見抜けなかったことが一つある。それは，この医者が「結婚」(8) を契機として，チャーリング・クロス病院を辞職したことである。つまりモーティマーは，ホームズの思惑とは異なり，「野心がない」からではなく，「家庭をもつ」(Ibid.) 必要から，都会を離れて田舎で医者になったのである。これを知ったホームズは，少し困ったような素振りを見せながらも，「僕達もそれほど間違っていたわけではない」(Ibid.) と強気とも取れる発言をしている。たしかに推理の大勢に影響がなかったとはいえ，ホームズがモーティマーの結婚について配慮を怠っていたことは疑えない。彼が微かな狼狽を感じたのは，おそらく結婚の事実が彼の推理の前提からもれていたからである。前後の文脈から見ても，彼が「確率の法則」に従って，その事実を推理の前提から排除した形跡はない。要するに，モーティマーの「結婚」は，彼には思いもつかないことだったと考えられる。

かつてホームズが，「判断を狂わされると困るので，僕は絶対に結婚しない」(『四つの署名』205) と宣言したことも，この探偵が「女嫌い」(「ギリシャ語通訳」595・「瀕死の探偵」386) であることも，彼がモーティマーの「結婚」に思い至らなかったことには関係がない。(もし関係があるなら，すでに彼の「判断」は，結婚や異性によって狂わされている。) それでは，彼が単に迂闊だったからなのか。たしかに，それが最も無難な説明に思えそうだが，しかしその理由にも説得力がない。そもそも彼は，事実と矛盾しない「七つの別々な説明」(「樹屋敷」439) を用意しているほどの探偵である。彼にとって，既知の因果関係を確認しながら，それ以外の部分に新しい因果関係があることを推理するのは，それほど難しいことではあるまい。つまり原理から見れば，すでに彼には，19世紀の中頃に定着していたと思われる「剰余法」(内井 48) も実践できたのである。しかも彼は『バスカヴィル家の犬』(以下 (　) 内は事例年: 1889) に先立って，『緋色の研究』(1881)，「花嫁失踪事件」(1886–88)，「ボヘミアの醜聞」(1888)，「黄色い顔」(1882–89)，そして「ボスコム谷の謎」(1889) など，犯罪の成立に結婚が関係した事例を幾つも経験しており，誰よりも「有効な知識」(『緋色の研究』12) を尊重した彼が，結婚に関する知識をその範疇に加えなかったとは考えられない。どうやら問題は，彼が過去の事例から，結婚を犯罪の解明に「有効な知識」として正確に把握してこなかったところにあるらしい。そのため彼には，「天才」を自認するほどの探偵なら見えるはずのものが，見えにくくなっている。

ホームズのモーティマーに関する推理の誤りは，たしかに些細に見えるかもしれない。しかし，この些細に見える例にも，結婚に関する彼の知識の欠落が反映しているとすれば，これを無視することはできない。実際『バスカヴィル家の犬』の物語が進行し，彼が活躍するにつれて，彼の知識から結婚が欠落していることも明らかになる。たとえば第 2 章で，ホームズは物語の構造の核となる「バスカヴィル家の呪い」(9) の伝説を聞いて，いかにも探偵らしい反応

を示し，かえって彼の「科学者」としての知識の偏向を露呈する。その結果，彼の「有効な知識」でも予測しきれず，先の「剰余法」でも把握しきれない余分な要因として，彼には結婚という制度が問題として残る。それを検証するためにも，この伝説をまず簡単に要約しておく。

この伝説の発端は，王政復古に至る革命時代，残虐非道なヒューゴー・バスカヴィルがバスカヴィル家を領有していたときにさかのぼる。この領主は近隣の娘を見そめて，相手にその気がないと知ると，彼女を誘拐して館に幽閉する。しかし娘は闇夜に乗じて，壁のツタを頼りに館から逃れ，それに気づいたヒューゴは，何匹もの獰猛な犬を放して追跡にかかる。酒席の猛者たちもそれに加勢して馬を駆るが，道すがら羊飼に出会い，その男から，哀れな娘と猛犬の群ばかりか，それを追いかける領主の後を「地獄の犬」(13) が疾走するのも見たと聞く。それでも彼らが馬を飛ばして行くと，今度はヒューゴーの馬が，主人を乗せずに，口から白い泡を吹いて走って来る。やがて追手のなかの三人が窪地へ馬を乗り入れ，そこに立つ古代の巨石の間で，恐怖と疲労で息絶えた娘を発見する。しかし彼らが最も驚いたのは，娘の死体でもなければ，その近くに倒れているヒューゴーの死体でもなく，彼に乗りかかり，喉元に喰いついて血を滴らせている「地獄の犬」の姿である。三人の追手の内，一人はその夜に生命を落とし，残りの二人も廃人として余生を送ったという。これが物語の顚末である。それから約100年を経た1742年，「ヒューゴー・バスカヴィルの直系」(11) にあたる子孫が，祖父から父へ語り継がれた物語を書き残し，あえてそれを息子たちにも伝えて，神の慈悲により禍根を絶つことを切望するに至る。

この物語を聞き終えたホームズは，欠伸までして，退屈きわまりない素振りを見せる。モーティマーに感想を聞かれたときにも，彼は「お伽噺の収集家」(14) にしか楽しめない物語だと答えている。ところが，モーティマーから「デヴォン・カウンティ紙」に掲載されたチャールズ・バスカヴィル卿の死亡記事のことを聞くと，彼は態度を急変させて真顔になる。この彼の反応の推移には，探偵としての彼の関心の所在が集約して暗示されている。何より印象に残るのは，この物語が強調する超現実の怪奇について，まったくホームズが関心を示さないことである。それもそのはずであり，彼は「科学の専門家」(22) として捜査にあたる探偵である。たとえば，闇，太古，死といったゴシック・ロマンス風の舞台設定も，彼の「欠伸」で揶揄された格好になる。他方モーティマーは，「科学の徒」(23) でありながら，あくまでバスカヴィル卿の死を伝説に関連させて，そこに「超自然」(22) なものの介在を想定する。たしかにバスカヴィル卿の死は「自然死」(15) として処理されたものの，死体が発見された場所から少し離れたところには巨大な犬の足跡が残り，しかも複数の人間が，事件の前から，伝説の「地獄の犬」と思われる「巨大な獣」(22) を見たと噂していたからである。

モーティマーの世界には，「既知の自然の法則」では説明のつかない現象があり，「科学で知られている動物のどれとも」異なる生物がいる (Ibid.)。ここから見れば，彼は既存の科学の限界を知る科学者である。他方ホームズは，バスカヴィル卿の死を伝説と関連させる科学者を観察して，既存の科学の限界さえ科学により証明する科学者である。彼が急にモーティマーの説明に耳を傾けたのも，この科学者としての関心からである。彼はその関心から，「あらゆる他の

仮説を排除」できないかぎり，「一般の自然の法則の外にある諸力」を受け入れられないと語る(27)。しかし重要なのは，たとえ彼がその「諸力」を受け入れたとしても，それは複数の仮説から「消去法」で帰納推理された仮説を前提として，そこから演繹推理により獲得された結論にすぎないことである。その方法の基本には，相変わらず，先に見たミルの「演繹法」の最初の二段階，つまり帰納と演繹が反映している。ホームズは従来の捜査の方法を応用することに気を取られて，彼の視野から単純な事実が消えていることに気がつかない。それは，あの伝説を記録した書類の最後にあった「但し書き」である。

そこには，この書類を書いたバスカヴィル家の末裔が，それを息子たちの「ロジャーとジョン」に残したことと，「彼らの妹エリザベスには何も告げてはならないこと」が記されている(14)。思い返せば，この伝説は，「ヒューゴー・バスカヴィルの直系」にあたる子孫が，祖父から父へ語り継がれたことを書き残した記録である。それをいま，彼は父として新たに息子に託そうとしている。つまり，この伝説の継承は，バスカヴィル家の嫡子たる男の，男による，男のための記録の継承である。たとえエリザベスが，幼少のため，その過程から隔離されたと想定しても，そこに認められる女の排除は否定できない。それでは，なぜ女が排除されることになるのか。バスカヴィル家とその嫡子たる男の系譜を主題とする物語，そこから考えられる理由は，ただ一つしかない。それは，この伝説の継承が，そのまま家父長制による家督権の継承を表現する物語となっていることである。それゆえ男の存在と女の不在は，別の異なる問題ではなく，同じ物語の構造を補完する別の異なる要因にほかならない。もしホームズがこれに気づいていれば，彼の捜査は，もっと初期の段階から進展していたかもしれない。そこで，これまでの考察を仮説として，彼とは別の筋道で事件を「再構成」してみる。

問題の根幹に家父長制による家督権の継承があり，バスカヴィル卿の死が殺人によるものなら，そこから予想される容疑者は限られてくる。最も公算の高いのは，残された莫大な遺産を相続する権利をもつ人間たちである。バスカヴィル卿は妻と死別し，しかも「子供はない」(childless: 15) ため後継者もなく，二人の弟も他界している。次弟は若くして亡くなり，ヘンリーという息子が現在カナダで暮らしている。末弟はロジャーといい，家系の横暴な血筋を受け継いだ「家族の厄介者」で，伝説のヒューゴーの肖像に「生き写し」である (23)。しかし，この男は1876年に黄熱病のため中央アメリカで亡くなり，さらに「結婚していない」(unmarried: 45) ことが第5章の捜査の過程で判明する。これらの人間たちで生存しているのは，次弟の息子ヘンリーだけであり，殺人の嫌疑がかかるとすれば，彼をおいてほかにない。しかし彼は事件が起こる前から推定相続人なのだから，特別な理由でもないかぎり，あえて叔父を殺すために海外から帰国して危険を犯す必要はない。何より，彼は新しい領主としてロンドンに到着した直後から被害者として事件に巻き込まれるから，犯人の動機を再確認することにこそなれ，彼を犯人とする根拠はない。もしバスカヴィル卿の次弟と末弟の死亡が確実なら，容疑者として残るのは，関係者のリストには不在の人間でなければならない。それでは，そのリストから隠されて，見えなくなっている存在とは誰なのか。

これには二つの仮説が考えられる。その第1は，家父長制からも家督権からも排除されてい

る女の存在である。ヴィクトリア朝のイギリスでは，未婚の女は固有の資産を認められていたものの，結婚に伴い，土地を除く資産は，結婚前の貯蓄から結婚後の賃金に至るまで夫の所有に委ねられていた。他方，既婚の女は，もし富裕であれば，均衡法により固有の資産を認められていたが，その種の資産を所有していた該当者は全体の約10分の1にすぎない[8]。たしかに，1882年に既婚女性に関する資産法が制定されて以降，すべての女が固有の資産をもつ権利を得たとはいえ，家督の継承権についてまで，男と女の平等が確保されたわけではない。たとえばバスカヴィル家の財産は，もしヘンリーが死亡したとしても，限嗣相続の規定により，近親の女には渡らず，「遠縁の従兄弟にあたるデズモンド家」(45) のジェイムズという牧師が受け取ることになっている。それゆえ，バスカヴィル家の財産を相続することは，女が犯罪を企てる直接の動機とはならないので，むしろジェイムズを容疑者と考えたくもなる。しかし，かつて彼はバスカヴィル卿から遺産を贈与したいと強く要望されたことがあり，そのときすでに「相続を受けるのを辞退」(45) している。その経緯が慎重に伝えられているところからして，彼を容疑者と考えるのは困難である。それと同時に，女が推定相続人のヘンリーを殺して，ジェイムズに遺産を相続させるために危険を犯しているとの見方も根拠を欠くことになる。女の私怨も動機として考えられるが，その線に沿って動く女の姿も，その種の感情を形成する文脈も，容疑者の絞り込まれる第5章でさえ見あたらない。そこで，別の角度から，先の関係者のリストを読み直してみなければならない。第2の仮説として問題となるのは，結婚という制度に隠されて，見えなくなっている子供の存在である。

バスカヴィル卿は結婚していたが，子供はなかった。次弟も結婚していて，しかも子供もいた。末弟は結婚していなかった。ここには，結婚の選択を介して，ヴィクトリア朝の男が取りえた存在の基本形が三種類に配分されている。この配分の原理を整理すれば，男は既婚か未婚のどちらかであり，既婚と子供は（子供がない場合も含めて）不可分の関係にあり，未婚と子供は不可能な関係にある。つまり，既婚であるときにのみ子供の有無が問題となり，未婚であるときには，末弟の例でわかるとおり，「結婚していない」と表現されるだけで「子供はない」ことが暗示される。この未婚に関する表現が象徴するのは，その表現から姿を消され，言語により表現されることもなく，おぞましい別名で呼ばれながら誕生する「子供はいる」ことである。他方，結婚により誕生する子供は，その姿を見せる前から囁かれ，言語により表現されて，実名で繰り返し呼びかけられる。この自然に見える事態そのものが，実は制度の結果であることを無言で露呈しながら，その制度に隠されて，見えなくなっている存在，それが，あの「結婚していない」という表現に封じ込められた子供の姿である。

無論ここに認められる原理は，そのままバスカヴィル卿にも適用できる。既婚とはいえ，彼にも「子供はない」からである。しかし彼の場合には，ロジャーのときと異なり，ある配慮が施されて，その表現から子供の姿を読み取りにくくしてある。つまり，ロジャーが家系の邪悪なものを代表する人間として表現されていたのに対して，バスカヴィル卿は「愛すべき人柄と寛大な心」をもち，人々から「好意と尊敬」を集めていた人間として表現されている (15)。それゆえ，彼の過去から隠されていた子供が現れて，生前の彼の誉れを汚すはずはないという

論法である。ここには人格（personality）と性（sexuality）[9] を一致させる，時代の倫理が強く働いている。しかし，これが象徴するのは，バスカヴィル卿の美徳ではなく，どのような人間にも，人格と性が一致しない可能性があることへの畏怖である。見慣れた自然から見慣れない超自然が現れることと，見慣れた日常から見慣れない非日常が現れることとは，似て非なるものではない。バスカヴィル家の伝説を聞いて，その超自然の魔物に関心を示さなかったホームズが，それと相似の構造をもつ非日常の異物について関心を示せるはずもない。実際ホームズは，バスカヴィル卿に「子供がない」と聞いたときにも，ロジャーが「結婚していない」と聞いたときにも，まったく何の反応も示していない。バスカヴィル卿の仮想の子供も，そしてロジャーの仮想の子供も，ホームズの推理の枠組をすり抜けて，彼の「有効な知識」から姿を消している。

無論，バスカヴィル郷に子供があったとの推理は，人格と性の一致を原則とする時代の倫理から見ても，犯行の動機から考えても，少し無謀にすぎる。他方，国を追われた悪人として，人格と性の一致を逆説として表現するロジャーには，最も公算の高い容疑者として，彼の子供が残ることになる[10]。それでは，この子供とは誰なのか。それを確定するには，ここでも「消去法」が有効である。ホームズ自身の要約からも窺えるとおり，消去するべき容疑者の数が，かなり限られているからである。つまり，バスカヴィル卿の友人で，彼の医者でもあったモーティマーと妻，バスカヴィル卿に仕えていた執事バリモアと妻，近隣の博物学者ステイプルトンと妹，そして同じく近隣の地主フランクランドである（52）。（他にも馬丁と百姓が挙げられているが，事件の文脈から離れすぎているので省略する。）この内でモーティマーは，ホームズの推理で見たとおり，善良な人柄の若者として表現され，事件の依頼人として誠実に事にあたり，まったく協力を惜しむところもなく，ワトソンの「医師録」（6）から身分も経歴も判明している。これらを総合すれば，彼がロジャーの子供であるとは考えられない。モーティマーの妻は，夫の「帰りを待っている」（58）と言及されるだけで，事件に関係する状況では登場しないので，疑惑の対象にもならない。それゆえ容疑者として残るのは，バリモア夫妻とステイプルトン兄妹，それにフランクランドである。

たしかにバリモア夫妻には，何かと疑われそうな言動が目立つ。たとえばバリモアは，バスカヴィル卿の死体を最初に発見した人間であり，主人が死ぬ前の状況も，彼を介してしか伝わっていない。しかも彼には，ヘンリーとモーティマーがロンドンで誰かに尾行された日のアリバイに不審な点がある。さらにヘンリーとワトソンが，深夜，女の忍び泣く声を聞き，バリモアに問いただしたところ，彼はそれが妻の嗚咽であると知りながら否定し，何か秘密を隠そうとしている。さらにまた彼は，深夜になると蠟燭を沼沢地に向けて揺らし，そこにいる何者かに合図を送っている。しかし，これほど状況証拠が揃いながら，バリモアをロジャーの子供と考えることはできない。実のところ，全15章の物語の初期の段階で，モーティマーがバリモアの経歴に触れたとき，その証明は終わっていたのである。それというのも，第５章での彼の説明によれば，バリモアは「先代の管理人の息子」であり，彼の家系は「四世代にわたり」バスカヴィル家に仕えてきたからである（44）。それゆえ，バスカヴィル家の家督権の継承に関し

て，バリモアには資格のないことが確認され，他の人間のための犯行か，誰かとの共犯でもないかぎり，彼が事件に関与したとは考えられない。しかも彼が事件に関与したか否かとは関係なく，この事件から利益を得る人間は存在するのであり，その人間の条件は，これまでの容疑者に関する考察から，ある程度は推理できる。それゆえ，ひとまず，この利益を得る人間を「再構成」してみる。

そこから推理できる人間像は，家父長制による家督権の継承を受けられるので，性別は男であり，ヘンリーが「30歳くらい」(29) なので，その従兄弟にあたる関係から，さしあたり年齢は30歳前後と推定され，バスカヴィル家の末裔であるから，その経歴は，少なくとも第5章までの段階では，正統を確認できるほど明白か，もしくは正統を否定しえないほど曖昧かである。これらの条件を満たす人間は，第5章までには見あたらない。但し，それは第7章になるまで，最後の容疑者に数えられていたステイプルトンが登場しないからであり，そして第8章になるまで，最後の容疑者として残されていたフランクランドも登場しないからである。特にステイプルトンは，性別はもとより，年齢もワトソンによれば「30歳と40歳のあいだ」(64) であり，先の人間像の条件を満たしている。経歴についても，本人の説明によれば，以前ヨークシャーで経営していた学校が「流行病」(71) のため不振に陥り，二年前にデヴォンシャーに移住して来たこと以外は曖昧である。この限られた情報から，彼をバスカヴィル家の末裔と証明することはできないとしても，それを否定することもできない。これらの条件から見れば，彼はロジャーの息子の姿に酷似している。

無論，この推理から得られた結論は，第7章の段階では仮説であり，ステイプルトンを容疑者として確定するには，それ相応の検証を必要とする。たとえば，第8章で登場するフランクランドも，その不可欠の対象である。それを裏づけるように，彼は「イギリスの法律」(79) に没頭して，「昔の荘園や民衆の規則」(Ibid.) に精通しており，家督権の継承にも対処できる知識をもっていることを窺わせる。しかし彼は「赤ら顔で，白髪の，怒りっぽい年輩の男」(Ibid.) であり，ヘンリーが「30歳くらい」なのを考慮すれば，従兄弟としては年齢が開きすぎている。ヘンリーの父が若くして逝去しているのも，これを傍証する。それゆえフランクランドは，ロジャーの子供とは考えられない。その結果，ステイプルトンの素性と容疑は，動かしがたいものとなる。これまで進めてきた，家父長制による家督権の継承を中心にした考察から，二つの重要な結論が導かれる。その一つは，この事件の犯人は，まずステイプルトンに間違いないことであり，もう一つは，容疑者の条件に関する推理が，すでに第5章までに終わっていることである。つまり，第6章以降の物語は，いま見た第8章のフランクランドの挿話も含めて，すべて第5章までの推理を検証するための過程にほかならない。しかも検証を必要とする項目は，フランクランドの件を除けば，わずか二つしか残されていない。その一つは，バリモア夫妻が共犯か否かを確認することであり，もう一つは，ステイプルトンが犯人であることを確認することである。

この内，バリモア夫妻に関する疑惑は，フランクランドの疑惑に続いて，第9章で完全に否定される。バリモアの妻には，別件で追われている弟セルダンがおり，バリモア自身も妻と共

に，この弟を沼沢地で庇護し，機を見て国外に逃亡させるつもりでいたのである。それゆえ，バリモア夫妻は今回の事件と無関係であることが判明し，その検証から，ステイプルトンを犯人とする確証が得られたことになる。ワトソンは第9章の第2の報告で，バリモア夫妻の秘密をホームズに伝えており，他方ホームズも，それを読む前から沼沢地で捜査を続けていたので，そこでセルダンを見かけて，この逃亡犯とバリモア夫妻の関係を知ることになった（165)。従ってホームズは，その段階で，容疑者に関する最後の推理を終えていなければならない。しかし実際の彼の推理は，事件後の「回想」の章から窺えるとおり，それほど理路整然と進行していたわけではない。その主要な原因は，彼が犯行の動機を前提として容疑者を推理せず，逆に容疑者を前提として犯行の動機を推理したところにある。

ホームズは「回想」の章で，現地に行く前からステイプルトンに疑惑を抱いていたと語りながら，その段階では「彼の行為の動機」(158）を見抜く術もなく，事件の流れが複雑に見えたと認めている。驚いたことに，第12章になっても，彼はステイプルトンの目的を「殺人」(127）と知りながら，「まったく動機は不明である」(135）と語っている。しかし，この事件の犯人の動機が，家父長制による家督権の相続にあることは，バスカヴィル家の伝説からも，それを利用した事件の展開からも，充分に予測できたはずである。つまり，この事件では，容疑者を前提として犯行の動機を推理するより，犯行の動機を前提として容疑者を推理するほうが，正確な結論に達する確率は高い。しかしホームズは，その手順で推理を進められなかった。それはおそらく，彼にとって，犯人の動機が目に見える形としてではなく，目に見えない力として機能していたからである。たとえば彼は，ヘンリーがロンドンに到着した直後に受け取った怪文書を調べて，そこに香水の匂いを嗅ぎつけ，この事件に女が姿を隠して関与していることを知った。しかし，その彼も，女が姿を隠して関与している家父長制が，犯人の動機となり，事件の構造となっていることには気づかない。物語の終盤にかけて，彼がステイプルトンを犯人として検証するときにも，やはり彼には，人間の心理と行為を統制する制度の力が見えていない。その制度とは，家父長制を存続させる基盤ともなる結婚である。

かつてホームズが「僕は絶対に結婚しない」と宣言したとき，彼は結婚そのものを否定していたわけではない。彼が結婚しない理由は，すでに触れたとおり，探偵として「判断を狂わされると困る」からである。彼にとって，結婚とは，彼が最も尊重する「真の冷静な理性」(『四つの署名』205）を破綻させる元凶にほかならない。それゆえ彼は，結婚はもとより，特定の異性と人間関係を取り結ぶことさえ考えない。つまり彼は，個人の意志により，結婚から身を引いている。しかし，その身振りは，彼の意志とは裏腹に，結婚がその程度にまで人間を統制していることを表現する。但し彼には，そこに介在している結婚の制度としての力は見えない。なぜなら，彼は独身主義を主張して，結婚の影響から逃れたと信じているからである。しかし実際，彼は結婚に牽引されながら反発して，それを禁忌の領域としたにすぎない。結婚を制度として把握していたのは，結婚の枠外に身を置こうとしたホームズではなく，結婚の枠内に身を置いていたステイプルトンである。そこにホームズの盲点があり，彼の捜査を遅らせた原因がある。

ステイプルトンはヘンリーを亡き者とし，バスカヴィル家の家督を奪い取るための手段として，妻のベリルを妹と偽り続けた。この偽称が成立したのは，それに先立ち，人間の性を統制する社会の制度があったからである。つまり，本来は男と女でしかない人間の生物としての関係を，夫と妻，兄と妹といった社会の関係に置換する原理がなければ，この偽称は成立しなかった。逆に言えば，ステイプルトンの偽称は，夫と妻，兄と妹といった関係が，その関係を維持している社会のなかでは自然に見えても，所詮，人間の性を統制する制度の結果にすぎないことを示唆している。それゆえ彼は，バスカヴィル家の推定相続人を殺害しようとして，社会の性の制度を揺るがしかねない行動を取っている。社会の規範から見れば，彼は二重に治安を乱す危険な人物なのである。

それにもまして重要なのは，ステイプルトンが偽称を介して，夫と妻の関係を兄と妹の関係に置換したことである。それというのも，この二種類の関係は，相似形を示しながら，相反する性の原理を表現しているからである。夫と妻は，性（行為）を前提とした，あるいは認知された社会の関係であり，その外側の相互の異性に対して閉じた関係を形成している。他方，兄と妹は，性（行為）を前提としない，あるいは禁止された社会の関係であり，その外側の相互の異性に対して開いた関係を形成している。ステイプルトンが利用したのは，ここに見られる原理の相違である。それゆえ，彼が妻を「妹」と偽称して，ヘンリーに接近する新しい経路を得られたのは，彼が妻を「独身」と偽称して，ヘンリーの男としての性を誘導したからである。ホームズも「回想」の章で認めているとおり，ステイプルトンは「彼女を自由な女（a free woman）の身分にしておくほうが，はるかに役に立つと見越していた」(126) のである。この「自由な女」という表現を前世紀の慣例に従って「独身の女」と解釈したのでは，ここに隠された問題が見えてこない。なぜなら，この「自由」は，結婚の状態を免れていることだけでなく，もっと根底のところで，性の拘束を免れていることを暗示しているからである。

ステイプルトンの計画には，彼の偽称を介して，妻の身分ばかりでなく，彼自身の身分にも変化をもたらす意図もあった。つまり，彼の妻が「自由な女」になるなら，彼は「自由な男」になるとの思惑である。実際，彼は「結婚していない男」(127) として，ローラ・ライオンズを懐柔し，彼女自身も関知しない方法で犯行に荷担させる。ローラは結婚していたとはいえ，夫に虐待されて，それを契機に離婚の訴訟を進めていた。ステイプルトンは彼女の離婚を前提として，彼女と結婚する約束をし，彼女の言動に対して「完全な影響力」(161) を得ることになる。この支配と服従の関係が成立したのは，ステイプルトンが妻を「独身」と偽称して，彼自身を「独身」に見せかけ，ローラの女としての性を誘導したからである。それゆえ，ローラが個人の意志でステイプルトンに従っているかに見えるときでも，彼女の言動は，人間の性を統制する社会の制度によって規定されている。つまり，ローラを目に見える形で支配していたのはステイプルトンではあっても，彼女を目に見えない力で支配していたのは，離婚から再婚の過程を介して，彼女の女としての性を社会に従属させる結婚の制度である。ステイプルトンは媒体として，その制度の力を利用していたにすぎない。

問題となるのは，この種の犯行の方法に対して，ホームズの捜査の方法が，まったく対処で

きないことである。但し，それは驚くことではなく，すでに第1章で，彼がモーティマーの結婚を推理しそこねたところから予見できたことである。それほど，彼の観察も知識も，そして推理も，男と女の社会の関係については機能しない。たとえば彼は，ステイプルトン兄妹についてワトソンから報告を受け取り，この兄妹の容貌の相違や奇妙な言動を知りながら，彼らの関係に疑惑を抱くこともない。ステイプルトンとローラの関係も，彼の推理を完全にすり抜けている。ホームズがステイプルトンの偽称を知ったのは，彼が第7章でのワトソンの報告を基に調査を進めた結果であり，彼の推理の結果ではない。ローラの場合には，もっと事態は深刻であり，彼女の離婚の予定も，彼女とステイプルトンの関係も，彼には，第12章に至るまで「空白」(125) として残っている。その「空白」を埋めたのも，彼の推理ではなく，第11章で彼女と面会したワトソンの報告である。名探偵のホームズとしたことが，これは，どうしたことなのか。

この経緯から察せられるのは，ホームズの観察と推理の限界である。つまり彼は，男と女の関係を観察するにしても，その関係を人間が形成した制度の結果として観察しているわけではない。それゆえ彼には，夫と妻，兄と妹といった社会の関係は，疑惑の対象にも，推理の前提にもなりにくい。その種の関係は，あたかも彼が触れてはならない対象であるかにさえ見える。彼の捜査の方法には，夫と妻，兄と妹といった社会の関係から離れて，それを派生させた男と女の，人間の生物としての関係に立ち戻る方法も認められない。それゆえ彼の観察と推理は，男と女の日常の事象に向けられても，彼らの日常の事象そのものを生成している制度のメカニズムには届かない。たとえ彼が，本稿の1章で見たとおり，演繹法を基本原理として，「観察と知識」を重視し，「消去法」で推理を進め，「確率の法則」を遵守し，「分析的推理」で検証までして，事件を「再構成」したとしても，事態は変わらない。たしかに，ステイプルトンとベリルも，ステイプルトンとローラも，彼の捜査の対象から外れたことはない。それゆえ，男と女の関係は，ホームズの観察と推理が機能する範囲で把握されて，彼の洞察を保証する。たとえば第12章で，彼はワトソンの報告を聞いて，ステイプルトンとローラに「親密な関係」(a close intimacy: 125) があると推理する。しかし彼は，その「親密な関係」が，男と女の社会の関係を表現する常套句であるとは考えない。人間の生物としての性を社会の性として編成する制度の力は，ホームズの思考に浸透しながらも，彼の想像を越える過剰として残る。興味深いことに，彼は「ボスコム谷の惨劇」(1891) で，「明白な事実ほど人を欺きやすいものはない」(271) と語り，単純に見える事件の落とし穴に注意を向けている。しかし，この見識は，彼の意図を越えて，社会の制度がもたらした日常の現象に適用されてこそ，その真価を発揮するものである。

それと関連して，今回の事件を解決するにあたり，ホームズが最終の段階で選択した方法は，銘記しておく必要がある。なぜなら，それは彼独自の原理の実践ではなく，ステイプルトンが偽称を介して機能させた性の原理の再演だからである。もし探偵と犯人の関係を「ゲーム」(153, 156) に喩えるなら，このときホームズは，相手のルールを模倣して勝負を進め，相手の裏をかいていたことになる。つまり，彼は捜査の大詰を迎えて，ステイプルトンがローラを利

用していたことを知り，その事実を彼女に伝えれば，彼女から事の真相を聞けるのではないかと考える。実際ローラは，ホームズからステイプルトンの実態を聞くと，にわかに彼女の知っていることを語り始める。この彼女の変化は，秘密と告白の関係が，人間の性に関する支配と服従の関係から派生していることを示唆している。

たしかにステイプルトンは，ローラの言動を支配していた。しかし，その支配は彼女の服従なくして成立も継続もしない。しかも彼が彼女を支配し，彼女が彼に服従していることを相互に秘密にしておかなければ，やはり彼の支配は成立も継続もしない。但し彼女には，この秘密を洩らすことも可能であり，それゆえ彼女は彼に支配されながら，彼を支配している。ホームズも認めているとおり，彼女は彼を「勢力」(145) の範囲に置いていたのである。他方ステイプルトンが頼りにできたのは，最初から最後まで，ローラと交わした（虚偽の）結婚の約束だけである。彼にとって，その約束は，彼女の女としての性を飼い慣らし，それにより彼の秘密を彼女に守らせて，主従の関係を維持する手段となっている。その見方に従えば，ホームズがステイプルトンの妻のことをローラに伝えたとき，ローラがステイプルトンの事件への関与を告白したのは，彼女の女としての性が彼の抑制を逃れたからと考えられる。つまりホームズは，ステイプルトンと異なり，結婚に関する事実の伝達を介して，但しステイプルトンと同じく，人間の性を統制している社会の制度を機能させて，事件を解決に導いたことになる。無論，この解決の方法は，本稿の1章で考察した彼の捜査の方法には認められない。彼には，日常の経験から，結婚の約束を反故にされた女は，相手の男に報復するとの恋愛の構図を推理することはできても，その構図を可能にした性の原理を推理の対象とすることは想定しにくい。もし19世紀が「恋愛」(love) の言説の流布した時代であり，20世紀が「性」(sexuality) の言説の流布した時代であるとすれば，ホームズはその過渡期を体現する探偵なのである。

夫と妻であれ，兄と妹であれ，あるいは既婚であれ未婚であれ，男と女の社会の関係に疑惑を抱くことは，それだけで社会の性の制度に裂け目をつくりかねない。ホームズの捜査の方法は，これまで見たとおり，その制度を侵犯しない範囲でしか機能していない。たしかに，それは彼の探偵としての限界にも見える。しかし，それはまた，前世紀の性の道徳から強制された限界であるかもしれない。たとえば，ホームズが「回想」の章でロジャーの結婚に言及するのも，その傍証となる。物語も終盤になって，あの「結婚していない」と思われていた悪人のロジャーでさえ，「実際には結婚して，子供も一人あった」(159) ことが判明する。他方，社会の性の制度を暴きかねなかったステイプルトンは，底なし沼で「永遠に埋葬」(156) されてしまう。その結果，ロジャーの性の道徳は是認され，ステイプルトンの性の非道は排除されて，結婚の制度は破綻することなく，社会も安定を回復する。この事件の展開と顚末には，人間の性に関する現象を統制して，そこに形成される秩序を標榜する社会の力が強く反映している。ホームズの推理も，社会の設定する秩序の範囲を守り，その内側に事件を囲い込む方向に機能して，個人の性の衝動を大衆の性の規範に還元することに寄与している。それゆえ彼にとって，事件はあくまで捜査の過程と遊離して起こる「こと」ではなく，推理の展開と平行して輪郭を備える「もの」となる。

ホームズ自身も認めているとおり，証明のないところには「事件」(135) もない。それゆえにこそ，彼には，「どれだけ危険を冒しても，事件を立証する (establish) だけの価値がある」(135)。この「立証する」という語を「確立する」と読み換えれば，ここにも，「赤毛組合」や「海軍条約文書」の事例と共通して，事件を「再構成」する彼の捜査の基本姿勢が認められる。実際，今回の事例でも，彼は幾多の人物や事象を観察し，その観察を基にして調査を続けて，容疑者を絞り込み，犯行を未然に防いで，犯人を自滅させ，それまで継起した出来事を「事件」として成立させる。そのとき，この犯罪に関連した要因は，ホームズが「回想」の章で実演しているとおり，そこに成立した「事件」の枠組を構成するように配置され，その枠組の収まるところに収まる。ホームズも捜査を終えるにあたり，「本質的なことで，説明されていないことは何もないと考える」(167) と自信を見せている。つまり，この事件は，彼の推理を支配している合理により方向を与えられ，最後には序破急をもつ物語としてある一つの「全体」を構築するに至る。その「全体」の外側に犯罪の痕跡はなく，それゆえ「事件」は完結する。ホームズの捜査の方法は変化することなく，彼の洞察と引き替えに，彼の盲点を残して。

註

1) Sally Mitchell 編の *Victorian Britain* (New York: Garland Publishing Inc., 1988) によれば，厳密には，イギリス人の女性で最初に医師となったのは，エリザベス・ブラックウェル (1821–1901) である。但し，彼女は11歳のとき家族とアメリカに移住し，医学教育もニューヨークのジェニヴァ・カレッジで受けた。彼女が1849年に医学博士の学位を得たころ，イギリスでは，医学教育の門戸はまだ女性に開かれていなかった。それゆえ，イギリス国内で医学教育を修めて，最初に医師となった女性は，エリザベス・ガレット・アンダーソンということになる (21)。
2) 内井惣七の『シャーロック・ホームズの推理学』は，ホームズの捜査の方法を推理の原理から考察した優れた論考である。本稿も，この書物に多くを負っている。
3) ホームズの「分析的推理」の基礎となる発想は，たとえば，確率論の項目で触れることになった W・S・ジェヴォンズ (1835–82) の「確率の逆算法」(The Inverse Method of Probabilities 394) にも認められる。
4) ワトソンの兄の時計には，質札の番号が四つも彫りつけてあり，そこから，この人物の経済状態を推理するには「消去法」は不要かもしれない。しかしネジを巻く孔のある中蓋に引っかき傷が多数あることから，その人物が酔っぱらいであることを推理するには，かなり「消去法」に頼る必要がある。
5)「類の推定」については，内井惣七の前記の書物を参照 (114–120)，犯罪者の「類型」については，富山太佳夫の『シャーロック・ホームズの世紀末』(青土社 1993) を参照 (112) のこと。
6) Bunson, Matthew E. *Encyclopedia Sherlockiana.* New York: Macmillan, 1994. 124–5.
7) これに関連して，富山太佳夫は，「名探偵ホームズの方法に内在する欠陥が排除され，外在化され，代表者として投影されたもの，それがワトソン博士ではないのか」(486) と指摘している。
8) Mitchell, Sally. 478–9.
9) Ann Oakley は，"Sexuality" と題された論考のなかで，sexuality を「性的な行動に関連した人格の全領域」(36) と定義している。(Stevi Jackson and Sue Scott, eds. *Feminism and Sexuality.* Edinburgh: Edinburgh UP, 1996.)。本稿では，sexuality を「文化・社会により構成された人間の性に関する現象のすべて」と規定する。
10) この父子の関係は，見方を変えれば，19世紀の英文学で流行した「囚人の帰還」(Reed 223) というモチーフの類例としても解釈できるし，ダーウィニズムの影響を考慮して「悪の遺伝」(274)

の類例としても解釈できる。それゆえ，「ロジャーの子供」は，前世紀の道徳・文学・進化の言説から派生した存在でもある。

Works Cited

Doyle, Arthur Conan. *The Hound of the Baskervilles*. Oxford: Oxford UP, 1993.

———. *Memories and Adventures*. London: Hodder and Stoughton, 1924.

———. *Sherlock Holmes: The Complete Novels and Stories Volume I*. New York: Bantam Books, 1986.

———. *Sherlock Holmes: The Complete Novels and Stories Volume II*. New York: Bantam Books, 1986.

Huxley, T. H. *Collected Essays: Science and Hebrew Tradition*. Vol. IV. New York: D. Appleton and Company, 1900.

Jackson, Stevi, and Sue Scott, eds. *Faminism and Sexuality*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1996.

Jevons, W. Stanley. *The Principles of Science: A Treatise on Logic and Scientific Method*. London: Macmillan and Co. Ltd., 1924.

Mill, John Stuart. *A System of Logic*. New York: Harper & Brothers Publishers, 1900.

Reed, John R. *Victorian Conventions*. Athens: Ohio UP, 1985.

Tomiyama, Takao. *Sherlock Homes No Seikimatsu*. Tokyo: Seidosha, 1993.

Uchii, Soushichi. *Sherlock Holmes No Suirigaku*. Tokyo: Koudansha, 1988.

Ziman, John. *Reliable Knowledge*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.

（本稿は，1995年度神戸女学院大学・女性学インスティチュート研究助成の成果である。）

（原稿受理1996年9月20日）